

[Original Paper]

**A study on the connotation 〈Illness-Kegare〉 in Japanese folk belief  
from the viewpoints of psychiatry**

Teruhiko Higashimura\*

Ranryoen Hospital

**\* Abstract**

Kegare is one of concepts that produce an effect on the mind of people and religious life in Japan. The concept of Kegare is concerned with the filthy, the bad, the ominous and sin. Death, child birth, menstruation, illness, injury and sexual intercourses are in the concept of Kegare. This paper examines if mental disorder is Kegare. A case of cat possession is selected to ascertain this question. The case was put in Kegare before she fell ill. It is clarified that possession is Kegare from the viewpoints of psychiatry, too.

**Key words** : Kegare, illness, mental disorder, possession

〔原 著〕

## 民間信仰における〈病気－ケガレ〉の結びつきに関する 精神医学的側面からの研究

東 村 輝 彦\*

【要 旨】 わが国の災因論としては祟りや憑きがあるが、医療人類学的研究から祟られたり憑かれたりするとケガレの状態になり病気になる。病気はまたケガレの状態であって〈病気－ケガレ〉の結びつきが民間信仰の中でくりかえされていることが明らかにされている。

精神病においても〈病気－ケガレ〉の結びつきが可能かどうか猫憑きの症例で検討した。症例は頸部にできる湿疹を不治の病あるいは体質と思いきらめようとしていく中で先祖や死んだ猫の祟りだと考えるようになり、突然の心的緊張の低下によってひき起こされた病気（憑依状態）であり、〈病気－ケガレ〉の結びつきがあると考えた。しかし、一般に精神病と言われている疾患をこのような結びつきでとらえるには難があり、憑依状態を呈するようなごく限られた精神疾患においてのみ可能であると考えた。

キーワード：ケガレ、病気、精神病、憑依

### I. はじめに

文化人類学の一つの分野に医療人類学（medical anthropology）がある。波平（1974, 1981）は、わが国の民間信仰におけるハレとケおよびケガレの概念を分析の理論的枠組の骨子として用いることによって病気の社会的・文化的意味づけを検討し、〈病気－ケガレ〉の結びつきが信仰の中でくりかえしでてくることを指摘している。しかしながら精神医学の分野からは、このような結びつきに対する検討はなされていない。

波平（1974, 1981, 1984, 1985）は、四国の山村、谷の木ムラで病気と信仰の関係を調査し、この部落における民間信仰の中心的位置を占めるのは祟り憑き信仰であり、「人々の認識では、病気には二種類あり、一つは『普通の病気』であり他の一つは『サワリ』である。サワリにはさらに二種類あり、それは『タタ

リ』と『ツキ』である。サワリとは、カミや祖霊や死霊その他の、人間の存在や能力とは異質なもの（それを『超自然的存在』と便宜上呼ぶが）がひき起こしたところの心身の不調である」と報告している。そしてこのムラでは精神障害は多くの場合サワリとされ祈禱の対象となるが祈禱師が「これは普通の病気」だと言って祈禱に応じない例もあるという。

「人々は病気になると医師の診察や治療を受けながらも、同時にその部落在住の、あるいはその一帯で評判の高い祈禱師に、その病気のさまざまな神や霊がたたったり、ついたりした結果ではないのかどうか占ってもらおう。神や霊がたたったり、ついたりするのは、生霊をのぞいては、それら超自然的存在に対して『罪』を犯したことへの報いであると説明されている。治療儀礼は、病状や、ついたり、たたったりしているものの種類によるが、いずれにしてもそれらの儀礼は『祓い』であり、病気の状態、あるいは罪を得た状態

\* 藍陵園病院

を『ケガレ』の状態と見て、そのケガレを祓うことによって病氣から回復する（罪を償った状態になる）と考えている」と波平（1981）は述べている。

精神病の和名（金子準二ら、1982）には、「たたり」、「もののけ」、「つき」などの呼称はみられるがケガレという呼称はない。そして狂気の系譜は、タブレーモノグレイーキチガイー脳病ー精神病となっている。

精神病においても〈病氣-ケガレ〉の結びつきがあると言えるかどうか、既に報告（東村輝彦、1979、1998）した症例ではあるが猫憑きの患者を取上げて検討してみることにする。

## II. 文献の概観

穢れは、日本人の信仰や精神生活と密接な繋がりを持っており、米井（1996）は、「穢れは、わが国の宗教文化において大きな役割を果たしてきた概念で、古代から現代にいたるまで、人々の思考や行動を規制してきた。（中略）死穢・産穢・血穢れなど、規範として定式化されていて人々が嚴重に忌み慎まなければならないとされたもろもろのことがそれにあたる」と説明している。けがれに触れること触穢しよくえについて横井（1975）は「触穢の話は私たちにとってずいぶんと遠いものとなっているが『けがれ』のほうは今日なお日常生活の中に脈々と息づいている。いわく、けがれる・けがす・けがらわしい等々。よごれ・よごれるなどということばとは似て非なる独特のニュアンスをはらみつつ、日本人の精神構造の陰微な一面をうかがわせることばとして、それは生きている」、「けがれ」とは、「人間に対して感覚的に不快の念を与えるものとしてとくに忌避され、災害や死をもたらす何ものか（悪霊）の発揮する悪しき働きをいう。触穢とは、そのような力に囚われ、支配されることをいい、人びとはこれを極度に畏怖した。禊みそぎ 祓はらえとは、その支配から脱出するための営みであった。（中略）日本におけるそれらの史的考察も、いつもあの記紀神話のうちに、その発端部のおもかげをみいだすことに始まる。ここでは『穢』は即『罪』であった」と述べている。米井（1996）によれば、穢れの具体的内容は、『延喜式』などに列挙してあるという。しかしながら「中世を通じて穢れとされる事物の範疇がずいぶんと拡大し、極端に言えば、好ましくないものは何であれ穢れと認識されるような事態が現れ」犯罪行為もすべて広い意味での穢れとみなされたという。

波平（1985）によれば「斎宮の祭儀の記録である

『太神宮諸雜記事』の神龜六年（七二九）の項には天災地変が起った。そこで占わせてみると、祭儀のための行列が通る道に死骸があったのだが、そのまま祭儀が行なわれた結果、斎戒の忌みを犯したことがその災いの原因であったことが明らかになったと記されている。死骸がころがっているというような当時としてはありふれた出来事を天災の原因とするのは、死のケガレを重視し、ケガレが災いをもたらすという認識が成立したことを示す。災いが起った時、その原因を死と罪という二種の不浄に求め、その間に因果関係を見ようとする認識である」「治療儀礼では、『祓い』を意味する儀礼が顕著である。つまり病氣とはケガレであり、そのケガレを祓い去ることによって治癒すると信じているのである。〈罪→病氣〉、〈祓い→病氣治癒〉という関係がケガレの観念を仲介項として一つの輪としてつながり、一連の因果関係を成立させている。病氣とケガレの関係は災因論としてのケガレの観念を示す好例である」「ケガレは災い（この場合は死をはじめとして人間の不幸のさまざまをいう）をひき起こし、しかも死や病氣や洪水や不作などの災いそのものもまたケガレであり、ケガレは新たなケガレを、災いは新たな災いをもたらすという、ケガレと災いの循環論を古代の日本人は持っており、そのケガレと災いの循環の輪を断ち切るものとしての儀礼が発達したのだ」と述べている。わが国の災因論としては祟りや憑きを抜きにしては考えられない。波平（1985）は、「死霊などに祟られたり憑かれたりするとケガレの状態になり病氣になる。病氣はまたケガレの状態なのである」と述べている。

民俗の事典（大間知篤三ら、1972）によれば、神の祟りは、神仏霊場などを粗末にしたり、禁忌をおかした場合に罰をうけること。屋敷の神の祠を移動したためにたたりをうけ、家運が傾いたなどというのはその例である。禁忌とされていることは、無意識におかしてもたたりがある。家族に月事のある者がいることを知らずに山へいき、大けがをした。帰ってはじめて、赤不浄をおかしたたたりであることを知ったなどがこの例である。現在では、「たたる」は「罰があたる」と同義語のようにになっているが、本来の意味は神意があらわれるということであった。尊い神霊に対する人のおそれが、たたるという観念を生み出したともいえる。たたりの結果として考えられているのは、盲目・啞など、不具になる場合もあるが、病氣・氣違い・倒産などの例もみられる。古くは、たたりのために命を落すことも少なくないと信じられていたという。

赤不浄は月経、月の穢れ、月の障りであり、そのケガレが祟りの原因と考えられていた。横井（1975, 1981）は「月の障り」が神の祟りを生じ狂乱状態におちいった公家とその下女の貴重な事例を報告している。「応永十二年（一四〇五）十一月、当時三条中納言実清邸に仕えていた歳四十ばかりの下女は、春日社祭勅使に任命された主に従って奈良春日社に詣でたのであったが、その後、主の実清が激しい病に罹り、巫女・陰陽師らに伺わせたところ、『神事不浄、奉穢御社之間、有明神崇之由』が告げられた。おそらくは死穢や肉食穢のあろうはずもないというわけで結局は疑念をもたれたらしいこの下女は苛しい問責の果てに、月事中（月障中）といえども推して南都へ下向せる由を自白したのであった。事情を知った実清の家中悉くが病悩し、やがてはこの下女のみが哀れにも錯乱のままのこされ、ついに息絶えたという」。そして横井（1981）は、「狂乱状態におちいって悶死したというのは、一つの結末部分にすぎなくて、原因と結果しかわからないわけで、告白→発狂→悶死への過程で、どういうことを口走ったのか何も書いてないので、これ以上のことはさっぱりわからない（以下略）」、しかしながら「個人としての下女の不幸な一件を通して、当時の社会の仕組み、それから社会の各階層がもっていた物の考え方、その基本部分が照らし出されることになるのです」と述べている。

「錯乱と文化」と題したシンポジウムが、1980年に精神科医と社会学者、歴史学者、民俗学者、人類学者などを交えて開かれているが、その中で波平（1981）は文化人類学的立場から精神科医が呈示した一症例「圭子」についてイエとケガレという視点から考察を行っている。「圭子が、日本の伝統的文化の中でケガレとみなされる性交や妊娠（仮に妄想であっても）を契機として発病しながら、圭子の症状は祖母と父の相続死によって、急速に良くなっています。これは二人の死によって、家族内の葛藤、特に圭子と父親との心理的葛藤が消滅したことによるとも考えられます。相継いで行われ葬式の儀礼のプロセスは、日本各地で行われている慣習と同じく、この圭子の住む地域においても、死によって惹き起こされたケガレをさまざまやり方でもって祓う行為の連続であったろうと考えられます。圭子の発病が、日本文化においてケガレとみなされてきた事柄を契機としていたから、ケガレの中でもその度合いが最も強い死のケガレを祓う葬式に深く参加することによって、自らのケガレも祓い、症状が軽くなったと考えられないでしょうか。私が調べ

た高知県の山村の場合、錯乱状態になって暴れる患者を、祈禱師がさまざまな『祓い』によって治療する。これときわめて似た働きを、二つの相継ぐ葬式が圭子に作用したのではないのでしょうか。圭子の年齢からしても、性交や妊娠がケガレとして認識されることは可能性としてないでしょうが、小さい時から祭の折などに月経中の女は祭事に関われない、妊娠中の女はお籠りに参加出来ない、などのタブーの存在を見聞きする中に、無意識に蓄積したものがあはずで、それが圭子の発病と治癒に何らかの形で関与していると考えられます」とコメントしている。

### Ⅲ. 症例の概要

24歳の女性。心因反応。両親と弟と住み近くの工場に勤めている。性格は、引込思案で恥ずかしがりや。恐がりやで被暗示性に富む。

ふとしたことで気付いた首筋の心因性と思われる湿疹を不治の病、体質的なものと思ひ込み悶々とした日を過ごすうちに先祖や猫の祟りではないかと思うようになった（1月前に飼猫が子どもを産んだが育てることに無関心で死んでしまった。死骸を箱に入れ、母と近くの山の中に埋め、花と線香をあげ吊った。寒いので毛布にくるんで埋めるよう母に頼んだが聞いてもらえなかった）。

やがて頭痛や倦怠感などを訴え仕事を休むようになったが、ある朝、突然、幻覚妄想状態をきたし、「暴力団や部落の人が来る。怖い」と弟の車で京都の叔母の家に逃げて行った。2日目の夜、独語し、泣いたりしていたが突如「くうっ」と匂いを嗅ぐような格好をして部屋の中を四つん這いになってくるくと廻りだし、そして歯を食いしばり、両肘を曲げ、爪を立て「おまえが悪い」、「殺してやる」、「呪ってやる」と母に飛びかかっていた（その時、顔と手は完全に猫になっていたと後で述べている）。皆に取り押えられて身動きできず、しばらく静かにしていたが、間もなく両手を上にかざし左右に振りながら「わたしは神様になった。わたしはお祖母さんが守ってくれる。あんた達は危ない」と厳しい表情で言うようになった。彼女の祖母は幼時に亡くなっているが、彼女は「お祖母さんになった。お祖母さんの魂が乗り移った」といかにも祖母であるかのような態度をとり、日頃の母の言動をたしなめるようなことを話しはじめた。

その後もつじつまの合わないことを言い、興奮するため翌朝入院となった。「何がなんだかわからないが

猫が乗り移っている感じ」と困惑気味に語った。表情は暗く、考え込んでいることが多く時に拒絶的態度もみられた。被暗示性が亢進しており、情動の動きに伴って、紅斑性の湿疹が頸部に一過性に現れる。声もかすれがちで「湿疹は猫に関係がありそうな気がする」、「猫の祟りだと思う。怖い」、「将来も聞きたい」と言う。湿疹が心因性のものであることを納得させながらハロペリドールなどを投与し経過をみまもった。「隣の年寄の患者さんが祖母に見え、その人の額や腕を撫ぜると祖母の霊が乗り移ってきて話が出来る」などと言っていたが、やがてこのような憑依状態は改善され頸部の湿疹も出なくなり3カ月後に退院となった。

#### 猫に関するエピソード

物心ついたころより飼猫がいた。三毛猫が井戸に落ちて死に弟が始末したことや小学校6年生の秋、子猫が俵の下敷になって死んだことなどを記憶している。猫は執念深く祟りが恐い、乗り移りやすいと幼い時より聞かされていた。中学時代には猫がいなくなり、その時、兄から猫は猫山に帰るのだと聞かされた。

#### 男性との出会いと別れ

中学を卒業後、紡績工場や衣料品関係の工場へ勤務して数名の男性を紹介されたが頸部の湿疹のことが気になり中途半端な付合いに終わることが多かった。Nだけは別でデートを重ねるようになった。3年前の春、夜桜見物に行った帰り、ホテルに誘われ、結婚を前提に肉体関係を求められた。しかし、湿疹のことを考えてしまって、彼の気持を確かめようとか彼を受け入れようとかいうような心の余裕はなく、その夜は肉体関係を持つことなく一夜を過ごした。その後も、何回となく関係を求められたが拒み通した。Nは彼女の気持がわからないと彼女をなじるようになった。しかし、湿疹のことを言いそびれ曖昧な態度をとり続けるしかなかった。そのためNは次第に彼女から遠ざかっていった。別れは悲しかったが湿疹のこともあり仕方のないことだと思った。彼といる時はいつも湿疹のことで頭が一杯になり、落ち着かず思うように話ができなかった。「理解できない」と殴られたこともあった。「子どもが欲しくないのか」と言われたこともあったが、いくらNから求められても受け入れることはできなかった。湿疹は体質的なもので子どもにも遺伝するだろうし結婚はできないと考えていた。

その後半年くらいたってから、弟の会社に勤務するKから交際を求められた。乗気ではなかったが、弟

の立場もあり付合いを始めた。Kは離婚歴があり結婚を申し込んできたが両親も反対した。彼と会う機会を避けるようにしたが、彼は執拗につきまとうので、女性週刊誌に書いてあった呪いをしてみた。それは男性と別れるためにする呪いで、男性の誕生日と名前を書いて、小指を針でついて出てくる血で四角に囲みながら別れられるよう呪文を唱えるというようなものであった。そのためかその後Kは彼女から遠ざかっていった。

両親のすすめで見合いを重ねたが湿疹のことが気になり皆断ってしまった。別れたNがまだ独身で京都で働いているという噂をきき、心あたりの会社に電話してみたが連絡はつかなかった。見合いの相手にNの面影を求めていることに気がついていた。

#### 社会文化的背景

憑依現象が患者を取巻く社会文化的状況と密接に関係していることは周知のことである。患者の生れ育った場所は、百済寺を中心に開けた戸数50戸位の集落で鈴鹿山系の西麓に位置し、名神高速道路が西端を走っているが豊かな自然に包まれている。ほとんどの家が兼業農家である。

百済寺は、西明寺、金剛輪寺とともに湖東三山と呼ばれる推古天皇、聖徳太子の御願によって創建された古刹で、近江西国三十三観音第十六番札所にもなっている。鈴鹿の山を借景とした庭園は有名である。

湖東には、敬神崇仏、祖先崇拜の風習が強く残っているとされている。信心深い患者の父親に湖東の人びとの素朴な姿をみることができる。毎朝仏壇を拝み、腹巻の中に入れた数珠で体の具合の悪いところがあると撫ぜ、母親が眼をわずらった時は、失明しないように占師の言うとおりにコンクリートで造った池を埋め、古い家を完全に壊すことなく現在の家を建てたが、両方の家をつかうと子どもが出世しないと言う占師の言葉に従って古家を壊しお祓いを受けたりしている。

このような父親の姿が当然、患者にも影響しており、家の近くの神社の「おまもり」を肌身につけ、かまどの神に毎朝水をあげ一日の無事を祈っている。死んだ人の供養が足りないと祟りがある、猫は祟りが恐い、乗り移りやすいという俗信を信じている。また、きらいな男から逃れるために週刊誌でみたという不気味なまじないを試みたりしている。

患者の勤務する工場には、お地蔵さんにつばをかけたから下肢が悪くなったと思こんでいる人がいたり、弟が気ままなのは先祖を粗末にしているからだと言

母親に新興宗教への入会をすすめる人がいて患者の周辺にはシャーマニズムと結びつきがみられる。

江口(1987)は、百済寺と山を越えて隣り合って位置するKという湖東の山村に発生した二例の狐憑きを報告している。

#### IV. 考 察

わが国には、病気としての狂気観と信仰と結びついた狂気観がある。信仰と結びついた狂気観の中では祟りや憑きなどが大きな比重を占めていてケガレと狂気について論じられたことはない。しかしながら波平(1985)が指摘しているように「崇られたり憑かれたりするとケガレの状態になり病気になる。病気はケガレの状態である」とするならば精神病もケガレの状態にあると言えよう。〈病気-ケガレ〉の結びつきを症例で検討してみよう。

憑依状態は、病理現象そのものの中に古代の心性をかいまみることが出来る興味ある現象であって猫憑きや蛇憑きの症例を民俗精神医学的立場から検討し報告(東村輝彦, 1979, 1983)したが、本論文では猫憑きの症例を改めて祟り憑きの視点から見直し、ケガレとの関連を考えてみることにする。

身体精神の異常をなにもものかの憑依または祟りだとする考えや靈魂への恐れは、呪術的で非科学的な俗信と迷信に支配された時代の産物であり、高度に発達した科学文明の中に生きる現代のわれわれの心からは失われてしまっているが、意識の奥底や基層文化、民間信仰などの中に根強く残っていて、われわれが不幸にみまわれたり、失意と絶望感に陥った時このような考えが自然と無意識の世界からよみがえってくる。

宮家(1994)は「私たちは日常生活において思いもかけない僥倖や災厄に出あったときには、その原因について何らかの意味づけをこころみる。その多くは合理的な説明であるが、こうした僥倖や災厄がとくに大きいときには、超自然的なものにその理由を求めがちである。その際ごく一般には、合格、仕事上の成功などは、『つき』とか『神霊の加護』とし、病気などは邪神邪霊の祟りや憑依のせいにしてしがちである」と述べている。

われわれの症例も頸部にできる湿疹を合理的思考や科学的知識ではとらえることができず、不治の病あるいは体質と思いきらめようとしていく中で、先祖や猫の祟りだと考えるようになった。波平(1984)は「近代医学が発達しても、病人やその親しい人々に、

『なぜ自分は病気になったのか』という疑問には近代医学は答えないのに対し、タタリ・ツキの信仰は、何らかの意味づけをするし説明をしているのであり、その点では明白な因果関係を人々に提示することができるのである」と述べている。

われわれの症例は、祈禱師、巫者、占師など宗教職能者のもとを訪れることはなかったが、先祖や猫の祟りだと思い悩むうちに突然の心的緊張の低下とともに急性幻覚妄想状態と憑依状態を来したものである。

タタリ・ツキの信仰からみると、猫憑きの状態は子猫の死がサワリのエージェント(波平, 1984)になって起こされた病気と解釈することができる。入院後も「湿疹は猫に関係がありそうな気がする」、「猫の祟りだと思う。怖い」などと語っている。幼時より飼猫がおり、猫に関する俗信や迷信に接する機会が多く、また俵の下敷になって死んだ子猫に対する恐れなど心の奥深く潜んでいたものが、古代の心性とともに危機的状況の中でよみがえったものと言えよう。そして猫は化ける、祟る、憑きやすいという恐れと非業な死をとげた霊は怨霊となって祟るという怨霊信仰が子猫を死なせ、いたわりを示さなかった母親に対し「殺してやる」、「呪ってやる」と猫の格好をして飛びかかるような行動をとらしたのであろう。

猫に祟られ憑かれたわれわれの症例は、ケガレの状態になり病気になっていると言えよう。さらに発病前に症例にはケガレの範疇に入るような、ケガレの発生源となったような言動がみられる。

夜桜見物の帰り、結婚を前提に肉体関係を求められたNとのホテルでの一夜の出来事や妊娠を求められたこと、Kと別れるために小指を針でつついて出てくる血で行った不気味な呪い、子猫の死骸を山中に埋めたことなどがわが国でケガレとみなされてきた事柄であったと言えよう。

長年にわたる臨床経験から精神病患者本人からは勿論周囲の人たちからも「何かケガレがかかっているのではないか」というような言葉を聞いたことはないように思う。「何かのタタリではないか」、「ついているのではないか」という言葉は今でも時々耳にすることがある。

女子の患者には、その発病、病状の変動が月経や出産と関係のある周期性精神病や産後精神病などがある。月経や出産はケガレの状態にあると言われてきた。しかし、今日ではそれらを不浄なもの、穢れたものとしてとらえようという社会的・文化的伝統はもはや失われてしまっている。

われわれの症例では、〈病氣-ケガレ〉の結びつきが可能になるが、一般に精神病と言われている病気はこのような結びつきの中に取り込むことには難があるように思われる。出来るのは憑依状態を呈するようなごく限られた症例のみではないだろうか。谷の木ムラの祈禱師が普通の病気だと祈禱に応じない精神障害があることは冒頭で述べた。

「憑依現象は、医学・民俗学・宗教学といった科学と、宗教とが交錯する場でもある」と河東（1994）は述べている。現代の憑依ともいえる水子霊の憑依に関して報告している寺岡（1994）は、「水子霊はこれからまだ祟りつづけるだろうか。医学の進歩は、生命の誕生のプロセスや死のプロセスをも操作的な科学技術の対象にしてしまった。受精の時から始まってまったく人工的な出産や、DNA レベルでの障害認知に基づく科学的な間引きがやがて一般化するのではあるまいか。その時にも水子という認識が生き残っているだろうか。DNA レベルで生きるに値しないと処理された生命にも、水子のような何らかの人格性が付与されるだろうか」と述べている。

われわれは、日々科学・医療技術の発展に直面している。臓器移植の普及、ヒト・ゲノム研究、分子遺伝学的研究など枚挙にいとまがない。しかしながら社会的な変化も含めて際限なく変化していく状況の中にあっても、人や霊の憑依は、わが国の文化や信仰と深くかかわっているのでわれわれの前から消えさることはないであろう。

## V. おわりに

ケガレという観念は、わが国の宗教や精神生活と密接な繋がりを持っており古代から現代にいたるまで日本人の思考や行動を規制してきた。

わが国の災因論としては祟りや憑きがあるが、医療人類学的研究から祟られたり憑かれたりするとケガレの状態になり病気になる。病気はまたケガレの状態であって〈病氣-ケガレ〉の結びつきが民間信仰の中でくりかえされていることが明らかにされている。

精神病においても〈病氣-ケガレ〉結びつきが可能

かどうか猫憑きの症例を取上げて検討した。その結果、一般に精神病と言われている疾患をこのような結びつきでとらえるには難があり、憑依状態を呈するようなごく限られた精神疾患においてのみ可能であることを明らかにした。

## 引用文献

- 江口重幸：滋賀県湖東一山村における狐憑きの生成と変容——憑依表現の社会——宗教的、臨床的文脈、国立民俗学博物館研究報告、12：1113-1179, 1987
- 東村輝彦、三好新之祐：猫憑きの1例——その民俗学的、社会文化精神医学的研究——、精神医学、21（4）：371-377, 1979
- 東村輝彦：蛇憑きの二例——その民俗精神医学的研究——、臨床精神医学、12（9）：1145-1151, 1983
- 東村輝彦：滋賀県湖東の山村で発病した猫憑き——動物と人間霊が継時的に憑依した症例——、精神医学、40（7）：787-790, 1998
- 金子準二、田辺十男、小峯和茂編著：日本精神医学年表、牧野出版：1982
- 河東 仁：憑依をめぐる精神医学略史と文献目録、シャーマニズムの心理学（大宮司信、河東 仁 企画・編集協力）、季刊AZ、32号：167-174, 1994
- 宮家 準：日本の民俗宗教、講談社学術文庫：246-255, 1998
- 波平恵美子：日本民間信仰とその構造、民俗学研究、38（3,4）：230-256, 1974
- 波平恵美子：病気の社会的・文化的意味づけ——病気による家筋の問題を中心として——、季刊人類学、12（1）：184-211, 1981
- 波平恵美子：イエとケガレの視点から、錯乱と文化 精神医学と人類学との対話（野田正彰、谷 泰、米山俊直編）、マルジュ社：237-244, 1981
- 波平恵美子：病気と治療の文化人類学、海鳴社：187-230, 1984
- 波平恵美子：ケガレ、東京堂出版：11-285, 1985
- 大間知篤三・川端豊彦・瀬川清子・三谷栄一・大森志郎・大島建彦編：民俗の事典、岩崎美術社：1972
- 寺岡政敏：水子霊による憑依、シャーマニズムの心理学（大宮司信、河東 仁 企画・編集協力）、季刊AZ、32号：162-166, 1994
- 横井 清：日本人の「穢れ」と「物狂」、錯乱と文化 精神医学と人類学との対話（野田正彰、谷 泰、米山俊直編）、マルジュ社：229-236, 1981
- 米井輝圭：穢れ、日本の仏教、6号：212-216, 1996